慈濟 246

慈濟基金會
2017 年 6 月

ものがたり

TZU CHI ● ツーチー

表見返し

文・證厳法師/訳・済運/撮影・涂鳳美

一瞬一瞬を精進する

怠惰は生命を荒廃させ

煩悩は無明を助長します

静思して諸悪から遠ざかり

永遠に三つの教えを修めましょう

目次

【社論】
故郷を守る志
慈願／訳 4

【特別報道】
小琉球島の涙
済運／訳 8

【健康ボックス】
最も健康な食生活とは
葉美娥／訳 38

【慈済台湾・台東】
台風一過の地に
タカサゴムラサキアカザが実る
黒川章子／訳 44

【世界の慈済・モザンビーク】
雨のち晴れ
山田智美／訳 54

【證厳法師のお論し】
何も求めず精進する
慈願／訳 62

【撮影集】
彼らのストーリー
済運／訳 74

【人生を描く・素人画家】
製図ペンで描く桃源郷
済運／訳 80

【衲履足跡】
小善でも行うべし
心嫈／訳 99

慈済大事記【五月】
済運／訳 106

表紙

小琉球島の慈済リサイクルボランティアは自分たちが生まれ育った土地が破壊され続けるのを見て忍びなく思い、リサイクル活動でこの土地が汚染される速度を少しでも遅くしたいと願っている。（撮影・黄筱哲）

【社・論】

故郷を守る志

◎訳・慈願

大甲媽祖様が年に一度各地を巡るお祭りが幕を閉じ、慈済ボランティアは今年も媽祖について回った人たち（巡礼者）の落としたゴミの清掃を行っていた。媽祖巡礼は人々にとって盛大な信仰行事であるとともに観光の目玉にもなっているが、一方で、環境汚染という後遺症をもたらしている。

小琉球島がその一例である。今月、台湾全国の村や町で活動する環境保全ボランティアを紹介するコーナー「大地の守護者」のテーマは、台湾本島西南の海に浮かぶ小琉球島を主題としている。

小琉球は珊瑚礁からなる小島で、古来漁業を営み、農業に従事する者は極少数だった。漁業で得られる収入は乏しいため、若者は外で働くため故郷を離れ、一時期過疎化と高齢化が加速した。しかしこの十年来、政府が島の観光業を推進しているため、多くの若者が故郷へ戻ってきて観光業に従事するようになり、この小島に新しい風をもたらしている。

観光化が進むにつれ、多くの問題も発生している。観光客がバイクを乗り回し、静かな島は一変して騒音に包まれた。砂浜に産卵する海洋生物は、人々の靴底に踏みにじられた。これらの稀少な海洋生物がこの世から消えてしまうことは残念なことだ。浜には台湾本島から漂流してきたゴミや、観光客の落としたゴミが散らばっている。

現地のゴミ運送のコストが非常に高いのは、民生資源からゴミ処理に至るまで台湾本島の船に頼らなければならないからだ。大量のゴミに船に積まれている様子を、メディアに「ゴミの島」と報道された。幸い政府がゴミ処理

の問題を解決したので、この危機がなくなり、一部の島民の間には環境保護の意識が芽生えている。

一九九六年、現地の慈済ボランティアは困難を克服して、集落に資源回収の風潮を吹き込み、島民の三分の一が環境保全ボランティアに参加した。十年後、「ゴミの島」は環境保全ボランティアの努力によって「ゴミが黄金に変わる」島になり、役所の資源回収の負担を軽減している。

小琉球にはわずか二十人ほどの環境保全ボランティアがいる。心ある民宿や店舗は資源ゴミをとっておいて、車で回収するボランティアに渡してくれている。また、ボランティアは至る所に落ちている再利用できる物も回収している。

困難な環境を克服して、彼らは捨てられたきのこの栽培容器やグラスファイバー製の漁業網を回収している。そして漁村の子供たちと智慧をしぼって回収物を入れる袋などいろいろな物を作っている。島民から地芳おじさんと親しまれている船会社の社長は、二十年近く回収物を台湾本島に運送し処理している。

暑くなる観光シーズンともなれば、資源回収の速度はゴミの出る速度に追いつかない。それでも小琉球島のボランティアは少しも気落ちせず、素朴な笑みを見せながら、蟻が須弥山に砂粒を運ぶような気力で、せっせと回収作業に専念している。私たちもその故郷を守る志を讃美し見習うべきだ。

大地の守護者

小琉球島の涙

天に向かってそびえる花瓶岩は
小琉球島の有名なシンボルである。
島の住民の誰よりも前から存在し、
島の変化を見届けてきた。
島の環境が以前のように美しくなくなっても
聳え立つ岩には成すすべもない。

◎文・黄筱哲、蔡瑜璇　訳・済運　撮影・黄筱哲

溜息

私は海辺の珊瑚礁。太陽と星と共に静かな歳月を過ごしてきた。私は人類に憩いの場を提供したが、心無い人類は私の上で焚火をしたので、私の心は傷つけられた。そして、人類はゴミをいっぱい残して行った。いったい私が何をしたというのか？

宿命

私はかつて青い海を抱く美しい白浜だったが、毎日大量の化学クリーナーが混ざった生活排水を飲まされ、生ごみも捨てられている。今では私は異臭を放ち、真っ黒な水が何本も流れるようになった。

商機か危機か

台湾本島西南沖に位置する小琉球島は全島が珊瑚礁でできている。北東方向からの季節風の影響を受けないため、海水の平均温度は二十五度と常に一定で、独特の自然環境の下に豊かな海洋生態を育んできた。観光客は水際に腰を下ろして波の音を聞いたり、海水の色の変化を楽しむことができる。またウエットスーツに身を包んで海に潜り、緑色のウミガメと泳ぐこともできる。

近年、小琉球はバカンスの代名詞となっている。政府の政策で静かな漁村だった小琉球は観光地へと脱皮した。大勢の観光客を受け

入れるために、現地の住民は次々と民宿を建て、多くの若者が島に戻ってきて仕事に就いている。

大鵬湾国立風景区行政情報ネットワークの統計によると、二〇一六年に小琉球を訪れた観光客は四十万人を超えた。大量の観光客が訪れたことにより、短期間に一万人以上も島の人口が増加した。わずか六・八平方キロメートルの小さな島に、大量のゴミやバイクの騒音、大気や排水汚染の問題をもたらし、長い間問題は解決されていない。「小琉球はかつて校長先生と船長と廟の三つが多い土地でしたが、今は観光客とバイクとゴミの三つが多くなりました」と住民が笑った。

フラッシュモブが現れた時

スノーケルは現地で最もポピュラーなアクティビティーの一つだ。観光客はインストラクターの指導の下に、海面に浮いたまま美しい海底の景色を堪能し、色とりどりの海洋生物や珊瑚礁を鑑賞することができる。そこは最も自然な生態教育の場で、休みになると海辺は人でいっぱいになる。

大多数の人は鑑賞するだけだから生態に影響を及ぼすことはないと思っているが、異なった角度から考えてみると分かるはずである。それが自分の家だとしたら、静かで自在な生活がなくなり、毎日招かれざる客が大騒ぎし、常に心配と緊張の状況下に置かれたとしたらどう感じるだろう？　住民によると、今はまだ数多の魚が泳ぎ回っているのを見ることができるが、すでに海底生物の種類の減少と消失が始まっているという。珊瑚に覆われた面積も年を追うごとに減っている。それは海の生態を愛する者にとって心が痛む知らせである。海中の世界の美しさ故に多くの人が近づ

くのだが、あまりにも多くの人が近寄るため、海洋生物の生存を脅かしている。もしここで立ち止まり、生物の生存空間を尊重し、距離を保ち、弄ぶのではなく遠くから見守ってあげられるなら、海洋生物はこれからも人々の目の前に現れ続けるだろう。

有効的な再生期間

小琉球でも人気のある潮間帯は潮が満ち引きする境界線で、引き潮の時には多くの生物が取り残されたままになる。たとえばウニやナマコ、甲殻類などの豊かな生態を見ることができる。民宿経営者はガイドを兼任しており、次々に観光客を連れてくる。しかし、来る人が多くなるにつれてこの砂浜も踏み荒らされ、ウニやナマコ、甲殻類が踏みつぶされて

いる。それによって直接的、間接的に潮間帯の生物は減少したり消失したりしている。

潮間帯生物の保護回復期を設けるために、毎年十二月から三月までの小琉球観光の端境期に観光客の入場を禁止し、四月から解禁するようにしている。しかし、地元の人はよく知っているが、一年のうちの四カ月間を保護期間にしただけでは生態の復元には足りず、やるせない気持ちで見ている。

潮間帯生物に保養回復期間があっても、解禁された後、見境なく踏み荒らしてよいというわけではない。それよりもどうしたら共存できるかを考えるべきで、人間は自然界の生物を尊重すべきである。一時の好奇心で生物を採取し、それを持ち出してはならない。生物が最も必要としているのは生息することであり、「水槽の中でしばし生きながらえること」ではないのだ。

大地の守護者

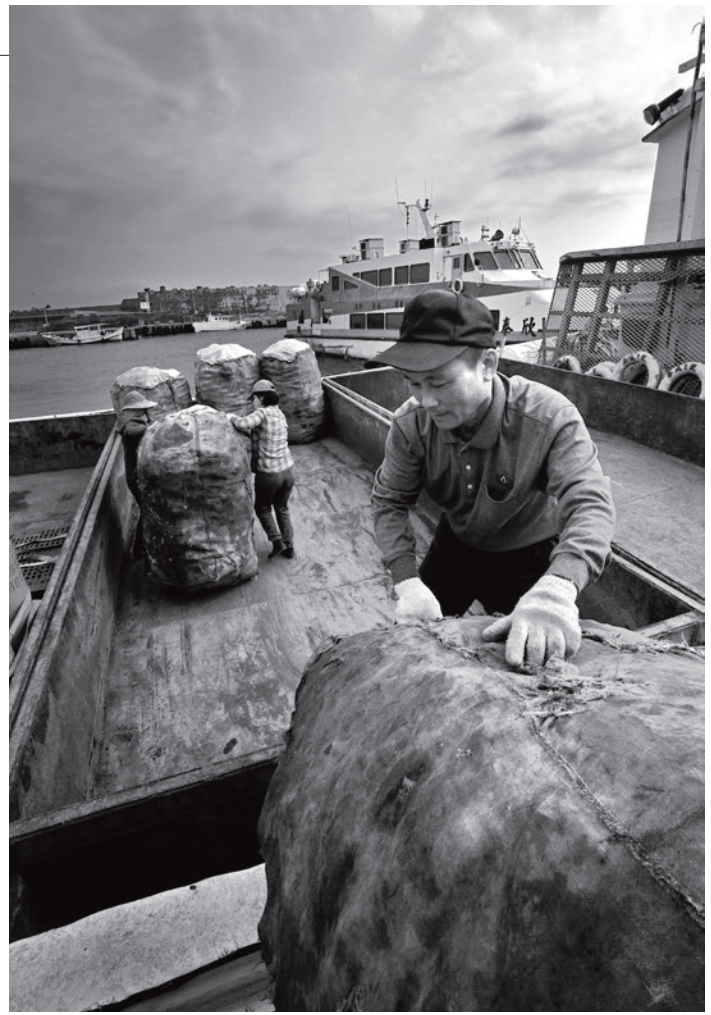
小琉球島

小琉球の声を聞け

風光明媚な島と豊かな生態を見ようとする世界各地の観光客を乗せた船が台湾本島からひっきりなしに白砂尾港にやってくる。一方、時を同じくして南東の大福港では人々が回収した廃棄物を貨物船に運んでいた。目の前のビニール袋につまっていたのはまさしく観光客や住民が捨てた回収資源であった。

小琉球のゴミは船で屏東県東港まで運んで処理されているが、船の容量が小さいためにコストが高くつくので、普段は島に積んだままである。現地住民のリサイクルボランティアは環境を護る使命を担っている。人々が回収できる物もゴミとして捨てられる中、二十年間回収、分類、袋づめなど、人手が足りない現地の清掃を補ってきた。

島には毎日何千人もの観光客が訪れる。小琉球の慈済リサイ



クルボランティアの人数は多くなく、二十人ほどしかいない。資源回収し分類できる量は限られている。観光産業が発展してから、現地にもたらした環境と生態への悪影響は彼らが一番よく分かっており、皆遺憾に思っている。

見えない風景

小琉球にはもともとゴミ焼却炉があった。だが、島内のゴミが多くなかったのと、機械の運転と人件費のコストが高い上に、海からの風で多くの設備が腐蝕して使えなくなったため、十年以上も使用されていない。しかし、島内のゴミは焼却炉の停止で出なくなるわけではない。近年の観光業の発展で、最盛期のゴミの量は平日の二倍になり、毎年のゴミ処理費用は一千万元（一元が約三・五円）ほどになっている。ゴミは船で屏東坎頂焼却炉まで運ばれている。

焼却炉からあまり離れていない所にゴミ処理場があり、リサイクルボランティアの李洪金善師姐（スージェ）（師姐は慈済の女性ボランティアに対する呼称）が毎日必ず来る所である。六十歳を過ぎた彼女は二十年間、ブルドーザーが積み上げられたゴミを谷に落として谷が埋め立てられるのを見てきた。彼女が生きている間にゴミ処理場が昔のような湿地に戻るのを見届けることはないかもしれないが、子孫にゴミの山を見せたくない。

金善師姐は現代人の浪費と言えるほどの消費を理解できないが、ゴミ処理場から漂ってくる異臭に耐えながら、ゴミの山から回収できる物を選別し、持ち帰って分類することでゴミの量を減らそうとしている。このような「山を動かそうとする愚かな年寄り」的のような精神は他人の目には面白おかしく映るかもしれないが、私たちは彼女を尊敬し、その精神に感動している。

どうしようもなくても堅持する

環境保護活動に参加して二十年になる陳壽山師兄（スーション）（師兄は慈済の男性ボランティアへの呼称）は小琉球の環境保護における重要な担い手である。以前彼は漁業で生計を立てていたが、今では海と大地を護るリサイクルボランティアである。その日、陳壽山師兄はリサイクルに使うトラックに私たちを乗せて回収物を集めながら指定場所を回った。彼は車窓の外を眺め、ここ数年、小琉球では環境保護活動が難しくなっていることを私たちに訴えた。

以前、小琉球ではリサイクル活動に住民

が参加して膨大な回収物を処理していたが、観光産業が発展した今、多くの住民は生活のために次々に民宿やダイビング専門店、土産物店を経営するようになった。観光客と回収物の大幅な増加とともに手伝う人手が急激に減ったことで、壽山師兄の負担がどれだけ重くなったか想像に難くない。しかしだからといって、彼はリサイクル活動をやめるようなことはなかった。例え一人ぼっちでも、何としてでも回収作業を終えるようにしている。もし、自分でさえもリサイクルの仕事をやめてしまったら、自分の住むこの島を見捨てるようなものだということを陳壽山師兄はよく知っている。

リサイクル活動は自分のためにもなる

小琉球のリサイクルはボランティアのほかに善意の人々の協力に頼っている。たとえば民宿や店が回収物を取っておいてくれたり、

指定場所に住民が回収物を持ち寄るなどの協力があって初めて、広い島内で円滑に回収ができるのである。ある程度の量が集まってから、ボランティアはトラックで回収する。

実はその後の分類と整理の段階でこそ、人手と志に対する試練が待っている。旅行の最盛期になると、回収する量は普段の数倍にもなり、ボランティアだけでは全く間に合わない。その上、以前使っていたリサイクル場は地主の要求によって二年前に返還しており、回収物の置き場がなくなってしまったため、暫時、壽山師兄の家の車庫と空き地に置くしかない。それがボランティアの環境保護の決意にとってさらなる試練となっている。

小琉球でのリサイクル活動は容易なことではない。数少ないリサイクルボランティアに頼る以外に、住民と観光客が共通の認識を持って分類の習慣をもつことによって、回収できる資源を大量のゴミにしないことが大切である。もし、自前の容器を持ち歩き、使い捨

て容器のゴミを減らせるなら、それが問題解決の最善の道なのである。

環境保護のために現地の物を使う

壽山師兄がある体験談を話してくれた。漁村ではよく「グラスファイバー製の漁業用網」を見かける。それは漁になくてはならない道具で、漁業の経験がある彼はその強靭な特徴をよく知っている。漁師がそれを廃棄処分する時、壽山師兄はそれをもらい受け、回収資源を入れるビニール袋を縫う糸として使っている。新品の袋は六十元するので長期的に購入し

続けることはできない。そこで、壽山師兄は処理場に行って破れて捨てられたものを拾い、きれいに洗ってから破れた部分を縫い合わせて使用している。それは手間のかかる仕事だが、節約のためにはどんなに手間がかかってもやる価値があるのだ。

小琉球でリサイクルする場合、ほかの地方よりもリソースがあるわけではなく、コストも高い。細かいところから気を配らなければ、不必要な浪費を抑えることはできない。したがって、現地での調達とリソースをうまく使うことが小琉球でのリサイクル活動の特色になっている。

目にした美しさと哀愁

小琉球の慈済リサイクルボランティアは皆地元の住民で、天然の美しい島が汚染されてきた経緯を目の当たりにして心を痛めている。自分たちが生まれ育った土地が破壊され続けるのを見て忍びなく思い、リサイクル活動に参加することでこの土地が汚染される速度を少しでも遅らせようと期待している。

ここ数年の間に整理した回収資源の大部分は観光客が捨てたもので、中でも見栄えの良い飲料を入れるペットボトルがだんトツに多い。その次に多いのが民宿業者が使い終えたクリーナーや漂白剤のボトルや缶で、そのようなボトルや缶だけでもどれだけの環境汚染になるかが分かる。観光客が増えれば、それだけ民宿業者の使うクリーナーの量も増える。小琉球島内には排水処理設備がなく、化学物質が妥当な処理なしに直接海に流れれば、海洋と生態は大きなダメージを受け、どんなに美しい海洋の景色もいつかは失われる日が来るだろう。

慈済ものがたり　34

大地の守護者

小琉球島

菩薩船の支援に感謝

小琉球のリサイクル活動はほかと違い、分類処理した資源を貨物船で台湾本島の東港まで運び、リサイクル業者に渡している。平均して一カ月に一回運ぶため、その前に回収資源を梱包し、一定量に達してから船会社に連絡して予定を決める。船が出港する前の日、ボランティアは梱包された回収資源をトラックで港まで運び、一袋ずつ船に乗せ、船は翌日の早朝に本島の東港に向けて出港する。

ボランティアたちが「菩薩船」と呼ぶのは、この小琉球のリサイクルボランティアのために二十年近く奉仕してきた貨物船「恭成」のことである。初めは船会社の年老いた黄地芳船長が発心して、無償で慈済の奉仕をしていたが、数年前に定年退職してからは彼の息子が船長を引き継ぎ、小琉球の環境保護活動も続けて支援してくれている。

もし「恭成」の支援がなければ、一回の運賃だけで九千元近くかかり

大変な経費になる。「恭成」は親子二代にわたって小琉球リサイクルボランティアの後ろ盾になっている。「もし彼らがいなければ、私たちのリサイクル活動はどうなっていたでしょう?」とボランティアが感謝する恩人である。

取り戻せない記憶

私たちが取材記録を書き終えて島を離れようとした日、一人の住民に出会った。彼も指定場所のリサイクルボランティアで、この島で生まれ育った人である。彼が六十一年間歳月を共にし、一番深く記憶に刻まれているのがこの海である。彼は小琉球の環境が元に戻らないほど壊れてしまっていることを悲しく思っている。以前、島には四、五軒の民宿しかなく、住民の親戚や友人を泊めるためのものだった。今では五百軒以上の民宿があり、今なお増え続けている。「小琉球の周りは天然の珊瑚礁

と砂浜で、天然の消波ブロックの役割を果たしていました。人類はどうして天然の海岸に人工の消波ブロックとコンクリートの建造物を積むのでしょうか?」と憤慨した。

私たちは自然のままの白い砂浜を見つけた。そこは住民の必死の抵抗によってやっと残されたものだった。現地に伝わる「招魂」という風習だからという理由で残された。招魂とは亡き者がさまよって故郷に帰る方向を見失なわないように呼び戻すことである。だが、幼年の記憶にある美しい小琉球がすでに破壊されてなくなってしまった今、先祖の魂をどこに呼び戻したらいいのだろうか?

【健康ボックス】

治療よりも予防が大切

最も健康な食生活とは

仕事を頑張った自分を
美味しい食事でねぎらう。
食後にはデザート、
寝る前にはまた果物、
このような食生活で
果たして大丈夫なのでしょうか。

◎口述・高以信（台南市立病院家医科医師）
文・陳淑音、陳淑貞
訳・葉美娥　絵・葉晉宏

私はよく皆さんに「朝ご飯に何を食べましたか」と聞いています。玄米、五穀粉、マントウ、パン、おにぎりと答える人もいれば、中には「朝ご飯を食べる習慣がない」と答える人もいます。朝食を少ししか食べない、あるいはまったく食べないと、どうしてもお昼前の十時過ぎくらいにお腹が減ってきて、元気がでなくなってしまいます。その代わり夕食によく美味しい物を食べている人は結構多いようです。

人体の生理機能は午前中が最も良い状態で、それに対して夜はよくないのです。ですから盛りだくさんの朝食と簡単な夕食にした方が、体の機能に合っています。

脂肪肝の原因は脂っこいものの食べ過ぎだとよく言われますが、実は甘い物の取り過ぎでもあるようです。若者は甘い飲み物を好み、高齢者は糖分の多い果物を選びがちです。果物を食べるのは、その甘さでなく、その中に含まれている酵素とビタミンを求めるべきです。夜の活動量が少ないなのに、盛りだくさんの夕食を採ったうえ、食後またデザートや果物を食べたら、体内で中性脂肪に転換され、これが長期間溜まっていくと脂肪肝になってしまうのです。

市販のクッキーや飲み物、コーヒーな

どの食品にはよく添加物として遊離糖（フリーシュガー）の標示があります。遊離糖とは穀物や根菜、茎菜などが由来の糖質ではありません。砂糖の一日の摂取量が二十五グラムを超えないように、角砂糖約五個分までにするようお勧めます。

市販の弁当にはよくヨーグルトがついてきますが、一本のヨーグルトには角砂糖約三個分の糖分が含まれています。小瓶のコーラでも角砂糖七個分ぐらいの糖分が入っているので、私たちは日々糖分を多く摂取しがちです。また甘い物は胃酸を分泌させ逆流性食道炎を起こりやすくさせます。ですから毎日五穀類を主食とし、それ以外の糖類を食べ過ぎないように注意することが必要です。

良い油を採っていますか？

三食正しい食事を摂取する前に、まず人間のエネルギー源となる三大栄養素について理解することが重要です。たんぱく、糖類（炭水化物）、そして最後は脂質です。

毎食は穀物を炭水化物の主な摂取源にします。ベジタリアンは豆類、キノコ類、海藻類、卵からたんぱく質とカルシウムを摂るようにします。そのほか大量の野菜と適量の果物も摂取します。その中にも五割以上もの食物繊維が含まれています。野菜とご飯と言う食べ方をお勧めします。

脂質は体のエネルギーを提供するのに欠かせない食物です。とくに炭水化物をたくさん採れない場合、脂質はエネルギーの主な供給源となるのです。良い油を摂取すれば顔に光沢ができ、冬も寒くないし、体内機能の働きを正常化させ、ホルモンと細胞膜の構成要素にもなるのです。

あらゆる植物油の脂質はたいてい良いですが、生成過程や保存方法、そして料理法まで、油の質を変化させないように注意することが必要です。

料理する時は一種類の油に偏らず、茶油、アマニ油、ココナッツオイル、ごま油などを順ぐりに使用すると、栄養素の吸収が高まり、味の違いも楽しめます。それにクルミなどのナッツ類にもよい脂質が含まれています。

水分の取り方は？

カロリーゼロの食物も重要です。その中に含まれている水分が人体を構成する細胞の基本要素となるからです。水は体温の調節、正常な循環と排泄を維持し、食物の消化と吸収を促して、細胞を代謝させる働きなどを持っており、「薬の王様」とも言えます。

毎日飲む水の量はどのぐらいが適当でしょうか？　体重一キロにつき三十五～五十ミリリットルの水が必要で、しかも飲む時は少しずつゆっくり飲むようにします。

クロム、セレンの微量元素も重要です。クロムは卵やバナナ、リンゴの皮、穀類から摂ることができますが、それらが異常な場合、血糖値のバランスが崩れてしまい、高血圧や心臓病が起こりやすくなるのです。セレンはナッツ類、はと麦、カボチャの種から摂取しやすいです。

とくにお勧めしたいのは海藻類です。海藻類にはたんぱく質や鉄、カルシウム、ビタミンA、カロチン、ビタミンB12などが豊富に含まれています。ベジタリアンの人にとって非常に良い食物です。

また、どんなに忙しくても、すきま時間を見つけて運動するよう心がけましょう。たとえば通勤時には歩くようにし、エスカレーターを使わずに階段を上り下りするようにし、早歩きをするのが効果的です。毎日三十～四十分続けていると、体力の向上が期待できます。

飲食のバランスと生活習慣が正常に戻れば、健康な体を維持できます。体内にエネルギーがあってさらによい心をもち、心の扉を開けば、福が得られるのです。まず自分の体を大切にしてから、もっと多くの人の世話ができるのです。

（慈済月刊六〇四期より）

気をつけよう！

加工食品やデザートの成分に多く含まれるファットスプレッドやマーガリンなどの硬化油と呼ばれるトランス脂肪酸は代謝されにくく、心血管系疾患のリスクを高める恐れがあります。美味しいと感じても、心臓に悪い影響を与えるので、取り過ぎないよう気をつけましょう。

台風一過の地に タカサゴムラサキアカザが実る

二〇一六年、台風一号が台東地方を襲い、太麻里郷の田畑と果樹園に深刻な被害をもたらした。

家業を継いで故郷を復興させようと、「穀物のルビー」を携えて自然農法にこだわる若者たちがいる。

◎文・葉秀品、葉子豪、王上秦
訳・黒川章子

初春の温かい陽射しの下、花蓮の慈済科技大学内にある教育農場では六千株のタカサゴムラサキアカザが実りの時を迎え、赤い穂を風になびかせていた。育てたのは、台風一号で被災した農家の若い世代、四カ月の努力の末やっと収穫にこぎつけた。

彼らは慈済科技大学でタカサゴムラサキアカザの栽培法を学び、収穫したタカサゴムラサキアカザを商品化して、ネット販売など新しい販路をも取り入れながら、故郷で再出発する道を選んだのだった。

農家の跡継ぎという重圧

「タカサゴムラサキアカザの栽培は難しくありません。ただ梅雨と台風には弱いのです」。広々とした農場の中で穂を

●衣料品の販売をやめて帰郷した江志鵬は、花蓮慈済科技大学で自然農法を学び、経済性の高いタカサゴムラサキアカザの栽培を始めた。（撮影／顔霖沼）

摘みながら、江志鵬はタカサゴムラサキアカザにたどり着いた経緯を語ってくれた。

江志鵬は台東県太麻里郷で生まれた。両親は米と蘭を作って彼と妹の雨蒨を育ててくれた。後にもっと商品価値の高いジャックフルーツの栽培に転じたのが成功し、太麻里でも有数の農家になっていった。

果物屋や観光客が次々と箱買いをしてくれるおかげで、江家の暮らしはより豊かに安定していった。しかし台東地方は農業以外の産業が少なく就職の機会も限られている。兄妹は職を求めて故郷を離れた。江志鵬は車に衣料品を積んで販売し、ジャックフルーツの収穫時期だけは帰省して手伝いをしていた。妹は結婚して高雄で暮らしていた。

江家の農地は、二〇〇九年は台風八号に、二〇一六年には台風一号という非常に大きな台風に見舞われ、深刻な被害を受けた。その時兄妹が故郷に戻って見た光景は、ジャックフルーツの木がなぎ倒されて葉は枯れてしおれ、強風にあおられた果実が地面に落ちて黒く腐敗している様だった。両親のそれまでの苦労は水の泡となり、再建を余儀なくされた。しかも、枯れた木を伐採して新しい苗を植

「穀物のルビー」と呼ばれる タカサゴムラサキアカザ

行政院農業委員会によると、台湾原産のタカサゴムラサキアカザはタンパク質が稲の２倍、カルシウム含有量は２５２３PPMと稲の５０倍もある。鉄分含有量は５５．６PPMと牛肉より３０PPM高い。カリウムは含有量が３５２８０PPMに達し、大豆の２倍、牛肉の１０倍以上にもなる。

以前は原住民族が集落で栽培し糧としていた。干ばつに強く、栄養価に優れているので、１９１８年に深刻な冷害に見舞われた時には、原住民族の多くがこの穀物で命を繋いだ。２１世紀になり、国連やアメリカ、カナダ、日本などでキヌアの価値が高まっているのを見て、台湾でも自国に原生するこの穀物がまるで「宝石」のように得難く貴重なものであることに気がついたのだった。

（郭耀綸、楊遠波、蔡碧仁、葛孟杰共著『紅藜推廣手冊』より）

えても、収穫できのは四年後になると聞いた。

台風八号の被害にあった時、両親には再度ジャックフルーツを植えて再建を図ったのだが、今回もそれでうまくいくだろうか。ある時、證厳上人が台東の被災地を訪れ、被災した農家に呼びかけるのを聞いた。「慈済科技大学でタカサゴムラサキアカザについて学んではいかがですか」

江志鵬の母親は張蘭鳳といい、慈済の訪問ケアのボランティアをしている。台風で被災した後、息子に花蓮にある慈済科技大学でタカサゴムラサキアカザについて学ぶよう息子を励まし、志鵬も故郷に戻って家業を継ぐことを考えていた。

そんなころ、妹と、退役したばかりの幼馴染の劉清鴻が一足先に慈科大学へ進み、劉威忠、耿念慈、郭又銘、陳皇曄ら指導教師のの門下生となった。「農業バイオテクノロジー研究センター」で研究する販売流通管理学科の生徒と一緒に、タカサゴムラサキアカザの栽培技術と関連商品について学ぶことになった。

自然農法へのチャレンジ

「穀物のルビー」と言われるタカサゴムラサキアカザは、栄養価値は非常に高いが収穫量が少ないので、価格は米の数倍もする。

栽培期間は短く四カ月で収穫できる。もし台風の季節を避けることができれば二期作が可能であり、収穫した後もほかの作物を育てることができるという経済性に優れた植物なのだ。

恩師の指導を受けながら、農業経験ゼロの若者三人で教育農場の二千坪を受け持ち、タカサゴムラサキアカザを苗から育て、水をやり、草取りをして、一から学んだ。

「苗を育てるだけで一カ月もかかるとは思っていませんでした」。発芽には三日から五日あればよく、水分が十分であれば手間もかからず成長の早い植物だが、これを農薬を使わずに自然農法で育てるとなると容易ではなかった。虫に食われれば手で丁寧に葉を除くしかなく、苦労は多かった。

雨の日も晴れの日も、江志鵬、江雨蒨と劉清鴻は腰を屈め、膝をついて虫取りをしなければならなかった。「専業農家は商売するよりずっと大変です」と江志鵬は言う。

「アブラムシが若葉に群がると葉が丸くなり、光合成ができなくなります。そ

●苗から育てる。江志鵬（右）は慈済科技術大学のバイオテクノロジー及び経済管理学科においてーから学び、商品化についても構想を練った。パウダーとティーパック（写真左）。
（撮影／王上秦）

れで、近くにラベンダーやミントなど香りの強い植物を植えて、天敵であるテントウムシを呼び寄せました」。大学では食物連鎖を利用した害虫対策を指導しており、それが農地の生態系を循環させているのだと江雨蒨は言う。自身も子育て中の彼女は、もうこれまでのように農薬散布によって家族の健康に害が及ぶ心配をしなくて済むと安心している。

三年間バイオテクノロジーを研究したことにより、タカサゴムラサキアカザがシートマスクや酵素、栄養スープ、栄養補助食品、ティーパックなど食品や美容アイテムにも利用できることが分かった。また、加工に使った後の茎や根は圧縮してバイオ燃料にしたり、菌類栽培の菌床や簡易コンロの燃料としても使えるという。経済的な効率性も十分高いと言える。

慈済科技術大学の羅文瑞学長は、「證厳法師は私たちに諭されました。私たちがやるべきは『慈善農耕』であり、その土地に根ざして技術を伝承させ、海外の災害援助にも役立ち、そして台湾農業をさらに充実させることに役立つことなのです」。大学は持てる技術をすべて公開し、台東の農民に指導を行っていくそうだ。栽培するだけでなく、ブランド化し、

インターネットの販売網を利用してそれに伴う顧客管理のしかたも指導する。農民がそれらを受け入れ、生産の経済性を高めることができるよう協力していく所存だ。

●江兄妹の努力は両親にも影響を与え、長年の農法を改善することができた。昨年11月に太麻里で植えられたタカサゴムラサキアカザは千株以上にもなり、今年の3月に収穫を迎える。母親の張鳳蘭は掌いっぱいに穂を掬って見せる。（撮影／江志鵬）

大地の恵みを大切に

今年一月の下旬、大学の農場でタカサゴムラサキアカザが収穫された。江兄妹は「シンプルで安全に」という販売方針にこだわりながら、パウダーやアカザ玄米茶を商品化し、市場調査を行った。「生産量は少なくても、包装や加工により使いやすくすることで付加価値を付けることができます」

台東の沿岸部は稲が育たない乾燥地だが、タカサゴムラサキアカザの生育には適している。江兄妹はすでに太麻里の実家に戻り、二毛作を進めている。両親の考え方も尊重しながら、耕作方法の改善に努めた結果、両親も農薬と化学肥料を使わない栽培に賛成してくれたそうだ。これからもさらに大地をいたわり、生態系のバランスを崩さないよう、自然農法を取り入れていくつもりである。

流した汗の分だけ赤い穂が色づいて実る。専業農家であってもただ天を仰いでいるだけでなく、安心して故郷へ帰り、未来を切り開いて行くことができることを実感している。

【世界の慈済・モザンビーク】

雨のち晴れ

◎文、撮影・モザンビークのボランティア
訳・山田智美

昨年一年を通して旱魃に見舞われたモザンビーク。今年二月、今度は熱帯台風の被害に襲われました。貧しい住民は日照りと大雨が交互に訪れる極端な天候に翻弄されています。現地の慈済ボランティアもまた被災しましたが、自分よりも困っている人を助けるために奔走しています。

南半球を襲う夏の嵐

アフリカ南東部に位置するモザンビーク共和国を二月十五日、サイクロン「ディネロ」が襲いました。イニャンバネ州に上陸した後、遅い速度で全土を縦断し、多くの州が甚大な被害を蒙りました。

上陸地点から六百キロ離れた首都マプトに居住する三千人の慈済現地ボランティアは、

三日間降り続いた大雨が止むのを待って、それぞれケア対象家庭の被災状況を確かめに向かいました。

マプトのマトラ区では七十六歳のセレステおばあさんが茫然自失となって立ちすくんでいました。アルミサッシの屋根が吹き飛ばされてしまったので、布団とビニール袋で覆っていました。

サイクロンが過ぎ去った後、一人暮らしのセレステおばあさんは拾ってきたビニール袋で家の隙間を塞ぎ、何とか雨風を凌げるようにしてはいましたが、食糧は何も蓄えてありませんでした。ボランティアはセレステおばあさんを慰め元気づけようと、手話を交えて慈済の歌、「みんな同じ家族」を歌いました。「すぐまた訪ねてきますからね」と言って、歌で悲しみを慰めました。

水がもたらした苦しみ

泥の中をボランティアは手を携えて進み、サントス区へ入りました。

低い窪地に住むアレクサンダーおじいさんは、慈済ボランティアがやって来たのを見て喜んで言いました。「酋長がサイクロンに備えるよう注意を呼びかけたので、前もって屋根を補強しておきました」。この事前の応急処置のおかげでアレクサンダーおじいさんの家

は無事でした。

街外れに建つ貧しい家の多くは茅葺きやアルミサッシでできた粗末なもので、雨や風を防ぎきることはできず、浸水し泥だらけになってしまいます。雨が降ると家中の入れ物を持ち出して雨水を溜め、体や食器を洗うのに使います。

近年の気候の変動はこれまでになく大きなものです。昨年は一年を通して日照りが続き、国の財政も逼迫して、物価が高騰しました。政府が一月に一年間の節水を発表した直後の二月、今度はサイクロンが来襲しました。連日の大雨と暴風は六十五万人に影響を与え、公共建築物百六棟、病院七十棟、教室九百九十八個、そして通信設備も被災し、二万棟以上の家屋が倒壊しました。

長い道の先に待つ笑顔

インフラ設備が不足する現地では汚水を処理しきれず、炎天下で疫病発生のリスクが高まっています。食糧の価格も二倍以上に高騰し、貧しい人々は塗炭の苦しみを味わっています。

二月二十日、慈済ボランティアはマホタス、ローランニ、フレネに居住する貧しい五百五十世帯の被災家庭に米などの物資を配付しました。体が不自由で配付会場まで来られない場合には、ボランティアが物資を届けました。サイクロン被害によって多くの道が

ふさがれているので回り道するしかなく、食事をとる暇もないボランティアですが、人助けをするという志があれば疲れも吹き飛びます。

セレステおばあさんは遠くからボランティアの歌声がしてくるのを聞きつけて、家の前まで出てきて待っていました。到着したボランティアはおばさんの子どものように回りを取り囲んで、災害の間どうしていたかなどを聞きました。ボランティアが『みんな同じ家族』の歌を覚えていますか」と言って、「私たちは同じ家族……」と歌い出すと、おばあさんは嬉しそうに目を細めて聞いていました。

私は同じ家族

被災直後に訪問した慈済ボランティアが、二日後には米と蚊帳を携えてまた来訪したことに、イザベルおばあさんは驚きました。

マドラに住む慈済ボランティアのジョアンナ・マクアクアは自分自身も被災しました。慈済ボランティアの愛に感動したジョアンナは隣人のマシアを慈済のボランティア活動に誘い、今回イザベルおばあさんに米と蚊帳を持ってきたのがこのマシアです。こうして愛が循環していることに、ジョアンナは感動しています。

マプトにある慈済の会所には毎日多くの慈済ボランティアが出入りしています。昨年は会所の前にバス停が設置されました。こうしてボランティアやケア家庭の人々がバスに乗るのに二十分も歩かずともよくなりました。マンゴーの木の下の慈済の家はみなに大切にされながら愛の集う場所となっています。

慈済ボランティアが二月に二度行った物資配付により、八百九十六世帯の四千人を超す人々に米と蚊帳が届けられました。

【證厳法師のお諭し】

何も求めず精進する

◎訳・慈願　絵・林淑女

五濁悪世において精進し

見返りを求めない心であれば

安らかになる

毎年五月の第二日曜日は、世界の慈済人（ツーチー）にとって灌仏会と母の日と慈済の日の三節句を一度に祝う日です。今年は五月十四日がその日にあたり、その前夜に四十カ国で合計五百三十五回の灌仏会が行われ、約三十万人が参加しました。

この喜びに溢れた日に皆で感謝の心を表そうと励ましているのです。仏陀が智慧と道理、そして正しい方向を教え導いてくださったことに感謝して、心に念ずることです。そしてさらに父母の養育の恩に感謝します。「百善よりも孝が先」というように、孝道とは善行のことで、孝も善もあるとこの世は秩序ある安寧な社会になることができます。天地衆生の恩徳に感謝しましょう。それぞれの職業があってこそ、人々

は豊かな生活を享受できるのです。

どの道場も同じ時刻、同じ信念のもとに天候の調和と国の平和を祈願していました。その中で台北の中正紀念堂では三万人以上が参加し盛大に行われました。百二十八人の宗教界の長老が鐘を打ち、六百人の青年が太鼓を叩いて、敬虔な祈りが諸仏菩薩に届きますようにと祈っていました。

宗教界の長老たちが手足の動作を揃えて整然と前へ出ると、人々は感嘆しました。長老たちは自分の地位を気にせず、身をもって人々に和の大切さを教えられ、仏法を高揚しました。

フィリピンのマリキナ市の運動場で行った灌仏会では、九千百人のボランティアが「立体瑠璃同心圓」の人文字を形作りました。どの字もはっきりしていて、躍動感あふれる隊形変化を見せてくれました。整然として厳かで人々は皆の心が固く一つになっているのを強く感じていました。

ハイエン台風の被害を受けたオルモック市とタクロバン市でも灌仏会が挙行されました。慈済ボランティアたちは四年以上の間被災者の生活が安定するまで寄り添ってきました。フィリピン人は大部分がカトリック信者ですが、

ボランティアは彼らの信仰を尊重して寄り添い、地域に和やかな空気をもたらしました。この寄り添いは彼らの心に響いて、年に一度の灌仏会に彼らも参加し、仏教への尊重を態度で表していました。

私たちの社会には感謝と尊重、そして愛が必要です。灌仏会で感じた敬虔な心を忘れることなく、この一刻から人と人との間に互いに感謝しあう心、愛の力を結集しなければなりません。人々が睦まじくあってこそ衆生の幸せがあるのです。

心を開け広げると
力量は無限に出る
無私の愛を捧げると
歓喜で心は満たされる

五月三日、南米エクアドルのサンタアナ教会では神父の協力を得て、以前水害に遭った住民や救済に訪れていた各国の慈済ボランティアなど、合わせて千人以上の人が和やかな雰囲気のなか灌仏会を行いました。

信仰する宗教は違えども、互いに尊重し讃え合い、舞台では心を一つにして愛を表現しているその姿は、人心を

善良の本性へと導いていました。

エクアドルは今年の四月暴雨に遭って全国七県が緊急事態に陥り、約十二万人が影響を受けました。また昨年四月にもマグニチュード七・八の大きな地震が発生し深刻な被害を受けました。この時、慈済は被災者雇用制度（被災者に賃金を供給して清掃や復興作業を行うもの）を実施して、住民の信仰の中心であるカナアの教会の復興を援助しました。真心からの奉仕は愛の循環の始まりで、ここから善の種が芽生えました。こうして育っていった現地ボランティアは、今年水害が発生した四月十日、被災地の調査を行って被災状況の資料を慈済へ送ってきました。

まさに昨年結ばれた縁によって、今年の菩薩道はアメリカ大陸の七カ国で一歩一歩前進することができました。アルゼンチン、ドミニカ、パラグアイ、ブラジル、グアテマラ、アメリカ、カナダの慈済人は四月二十三日、被災地に到着して救済活動を行いました。

水害の後の復興は緩慢で、二十日が過ぎても街路は依然としてぶ厚い泥に覆われていました。もともと貧しい人たちに天災が重なって、天を仰いでもしかたがありません。ボランティアは災害調査の時、高齢者や子供、障害者を見ると両手で抱擁して慰めていました。

慈済人はマナビ県のポルトビエホ市とサンタアナ県で、被災者雇用制度を用いて被災者を励まし、力を合わせて住居の周りを整理しました。ねばねばしたぶ厚い泥を素手で取り除くのは容易ではありません。慈済人は雇用した被災者と肩を並べて大型機具で整理していました。始めた時は参加者が少なかったのがだんだん多くなって、学校でも先生と生徒が力を合わせて整理し、地域の住民と互いに励まし合っていました。

住民たちは災害に遭っても天を怨まず善念を抱くようになりました。九日間に一万七千人が被災者雇用制度に参加して街路はきれいになり、心も立ち直って、美しい社会が甦りました。学校でも教師と生徒たちは五月の学期開始に間に合うように頑張って清掃し、いくつもの心温まるストーリーが生まれました。

被災者雇用制度で得た現金収入や貧困家庭への見舞金で、地域は甦りました。このお金を元金として小さな商いを始めることができたからでした。ま

た、形ある物を得たことよりも、慈済人によって心を開くことができたことは最も重要なことです。隣人同士の助け合いの精神や家族の情、郷里に対する情が生まれました。

アメリカ大陸の慈済人は無私の愛をもって真心から支援したので、住民はまもなく安らかな生活環境を取り戻すことができました。

十二日間、慈済人は二つの市と県で、苦難の人々を泥沼から助け出していました。ちょうど暑い盛りで、日焼けして真っ黒になりましたが、着実にやるべき事をやり遂げた喜びがありました。

たとえ猛烈な暑さの中でも心は涼しく感じられ、愛に満ちた力で敷いた道に、一粒の善の種を落として大樹に育て上げました。それがいつかこのエクアドルで菩提の林に成長して、その日陰をさらに多くの人に提供し、苦難の人を庇護するよう願っています。

何事も気にせず
心を一つに協力する
捉われなければ
心は軽安自在

菩薩は仏壇に置いて供養するだけのものではありません。「菩薩の縁は衆生との縁」と言いますとおり、身をもって菩薩の教えに努め励み、衆生の苦しみを解いてあげると、どの人もこの世の菩薩になることができます。

愛は人の心を広げ、衆生を自分の身内と見なします。善事を行う時は遠いか近いかを問わず、また自分の力が足りているか足りていないかを気にしてはなりません。一滴の水も海中に入れば慈悲の航路となり、衆生を載せて彼岸に着くことができます。

心の内にある誠の思いを発露することは、苦労を恐れずともに善事に奉仕することです。もしも何かにつけて気にしたり、気持ちが高ぶっていると、煩悩に心が捉われて力を発揮することができません。

この世のすべては夢幻泡影のごとくと言いますが、生命の価値を見極めて短い人生を把握して、「諸悪莫作、衆善奉行（諸悪をせず衆生は善を奉行する）」して精進することです。奉仕に見返りを求めず、貪りも欲も、何の差し障りもあってはなりません。心が安定していれば衆生を済度する力が満ちてきます。

五濁悪世の中では見解が偏ると、是

非が混濁してしまいます。そうなると正法を堅持して菩薩道を歩むことが困難となり、苦労となります。無明の泥沼から人を助けようとする時に、自分もその危機に陥らないことです。

厳しい環境下にあって、いかにして道心を守り、退かないでいられるか。それには「身安楽行、口安楽行、意安楽行、誓願安楽行」の四種楽行を奉持して、安らかな心で修行することです。

身安楽行とは、清浄な心を保ち諸悪から離れることです。危険な境地を避けて、誹謗や悪行の影響や障礙を受けてはなりません。警戒心を高め、言行を慎み、精進に勤め励むことです。

口安楽行とは、考えもせずに話をして人を傷つけ自分も傷つくことです。時を無駄に過ごさず、益にならない言語を慎んで、善を勧めることです。

意安楽行とは欺きや虚妄、嫉妬は智慧と慈悲を妨げることをいいます。誠意、正向、実在であってこそ衆生から信頼されます。常に「無常、苦、空」を理解して、奉仕した後もそれに捉われなければ、軽安自在になることができます。

誓願安楽行とは「四弘誓願」を立てることです。一切衆生の済度と無尽の煩悩を断ち、無量の法門を学んで菩薩道を広く平らに敷きます。そしてその道を長く歩いて心でその風景を体得すると、仏の智慧を会得することができます。自分だけが得られるのを望むのではなく、衆生がともに菩薩道を歩くように願うのです。

修行の道を歩く時、心を静かに保ち、喜びの心で何ごとも甘んじて受け入れるなら、人々に法を伝えることができ、自分の心が汚染されることもありません。衆生が安らかになって苦から離れ、楽を得ることができると、心が諸仏菩薩に届きます。

人の苦しみを見て
己の幸せを知る
自分は腹八分で
二分で人を助ける

二〇一〇年の一月、ハイチでマグニチュード七の大地震が発生しました。慈済人がただちに救済に駆けつけた時は、大地はひび割れ、人の命が犠牲となり、長期の貧困者が陥った苦境は見るに忍びませんでした。その人たちは今でも被災者のそばを離れずに菩提の心で奉仕しています。今年の四月には台湾から米を送りました。

アメリカに住む慈済ボランティアの陳思晟さんは、震災後の七年間に六十五回もハイチとの間を往復して苦難の人々に寄り添ってきました。治安が悪く大型配付活動の時は国連の平和維持部隊の保護が必要でした。毎回の配付は困難であっても、真心の愛と尊重の態度で住民とつき合っているうちに、今ではブルーのシャツに白いズボンの姿の慈済ボランティアを見ると、恩人がきたと言って喜んで歓迎してくれるようになりました。初めのころのような混乱はなくなり、列を作って待つようになりました。陳さんの勇気と優しい態度が彼らの心を解いたのです。

毎回配付物資を受け取る時、住民は片手に引換券、もう片手に靴を持ちます。それは配付の時に押されて靴がなくなるのを恐れているからで、ほとんどの人はスリッパです。物の豊かな生活を送っている私たちには、彼らがどれほど貧しいか想像もつきません。

二年もの間内戦の苦しみを受けているイエメンでは、食糧と飲料水が不足しているため七千人以上が命を落としています。今年はさらにコレラが爆発的に流行し国家は緊急事態に陥っています。統計によると、イエメンでは平均して十分に一人の子供が栄養失調で亡くなっています。屈強であるはずの青年は枯れ木のようにやせ細って、立っているのも困難で地上をはっている様子は、まさにこの世の地獄で、その悲惨な状況は見るに忍びません。

人の苦しみを見て己の幸せを知る。幸せな人生を送っている人は苦しんでいる人に手を差し伸べなくてはなりません。奉仕のできる人は、他人から恵まれる人よりも幸せです。十あるうちの一を人にあげても自分の生活に影響しません。皆が少しづつ節約してそれを足し合わせると、苦難の人を助ける大きな力になります。

苦難と無常のこの世に対し、健康と富を享受している人は、今現在が常であると思っていますが、それは間違いで、常に警戒しなければなりません。生活の安定している台湾ではさらに福を知ってその福を大切にして、食べ残しをなくし、浪費を避けなくてはなりません。腹八分が健康的でちょうどよく、栄養過多は体の中にゴミを蓄積させます。腹八分にして二分を残して人助けに役たちましょう。

彼らのストーリー

蕭耀華のプロフィール：
マカオに生まれ香港で育つ。台湾の大学を卒業し、カメラマンとして立身。仕事で世界各地を訪れ、戦争、災害、貧困、そして、日常の中で遭遇した数々の出来事。

憂いの味

◎文、撮影・蕭耀華
訳・済運

セルビア北部の国境に近い町シドで偶然、シリアから来た女の子と出会った。彼女の表情はある一文を思い起させた。

「少年は憂いの味を知らなかったが、知っているように見せかけた。知ったふりをすれば、無理してでもそれを強調するしかなかった。憂いを嫌というほど味わった今、何も言えなくなってしまった。何も言うことがないので、秋は涼しくていいと言った。」

それは学生時代に読んだ文章である。成長してから読み返してみると、格別な思いがこみ上げる。これは作者の体験に基づいたもので、人類共

セルビア　2016.2.3

通のどこにでもありがちなことだが、子どもが楽しくなく、言いたいことも言えない状況は現実にはないのだ、と私に語りかけているようだった。

子どもが少年期になる前に憂いを存分に体験し、言いたいことも言えないというのは、まるで人生の酸いも甘いも知り尽くしたようである。

そう、まだ幼い彼女は現実を理解しないまま、大人たちについて慌ただしく故郷を離れ、海を越え、山を越えて遠い国に行き着いた。一路困難な日々を過ごしてきても、人生の方向を変えることはできない。一食にありつくために、別の場所に移動して生活するだけである。空腹は満たされず、冷たい体を温めてくれる服もない。ぐっすり眠ることもできず、疲れ切っている。これは彼女だけの境遇ではなく、近年、中東地域全般の状況であり、数百万の老若男女がそうした生活を強いられている。故郷から異郷に追われる悪夢は人類の共業と言える。

いつになったら不安定な生活から脱することができるのか。それは誰にも分からない。

バナナを売る少女

頭の上に載せた丸い鉄の盆には数本のバナナが載っている。バナナは少女と同じように細くて小さく、発育不良気味だった。

数本のバナナは少女の売り物で、頭に載せ、声を上げて街を歩く。これで少女は生計を立てている。何本売れただろう？　利益は？　それで生活できることと想像するのは困難だ。

しかし、そのような商売は、経済的に世界でも下位に位置するこの西アフリカのシエラレオーネでは至る所で見かける。数個の果物や数本のサイダー、数個のパン、数個の卵、櫛、ボールペン、草履、歯ブラシなど。頭の上に載せた盆から真実が見えてくる。

アクロバットのように鉄の盆を頭に載せて商売する人たち。彼らは、はるか昔の一九五〇年代に、仕事もなく困窮して苦しい生活を送っていた私の父を思い起こさせた。シエラレオーネで街の至る所で頭に物を載せた人々が行き交う光景

は、父や祖父の苦しみを私の目の前で再現していた。

これほどまでにやり場がなく、悲しい生活を写真で表すと、その状況を感じ取ることができず、美しささえ感じてしまうのはどういうことなのだろうと疑問に思う人がいるかもしれない。人生の悲惨さやそれ故の美しさとは、苦しい生活から脱して成功する前に待ち受ける試練なのかもしれない。それらにどういう心境で接し、どういう角度で見るかは人それぞれに委ねられている。

シエラレオーネ　2016.9.28

【人生を描く・素人画家】

製図ペンで描く桃源郷

腕は一本なくなったが、呼吸していることに感謝している。
呼吸していれば、絵を描いたり、本を読んだりできる。
仏法を絵と融合させれば、
生命の静けさと安定した力を見つけることができる。

◎文・張麗雲　訳・済運　撮影・黄筱哲

目の前の作品は建築設計図のように規則正しく描かれている。五十二歳の李道源がこれをどのように描いたのか説明してくれた。「墨色の製図ペンとB4の画用紙を使いますが、描くのに二週間かかります。毎回一センチから五センチ幅くらいまでを少しずつ模写していきます」

絵を習ったことはなく、自己流で描いた細い線の製図ペン画は出版社に認められた。仏光文化事業企画が出版する《仏教高僧百人漫画全集》で、魏晉南北朝の高僧僧祐大師の絵を彼に要請された。

●居間の片隅は李道源が絵画を作成する場所。机のスタンドが昼間から深夜まで付き添ってくれる。壁にかけられた数多くの仏画は白の水彩絵の具で描いたものだ。

作品を描き始めて間もない一九九九年九月、台湾中部大地震が発生した。李道源が住む南投県草屯は大きな被害を受けた。被災して不安な状況の中、突然頭の中が真っ白になり、しばらく何のイメージも湧いてこなかった。僧祐大師の漫画を完成させるために、彼は一から大師の物語を読み直し、メールで出版社とやりとりしながら、どうにか創作を続けた。

きめ細かい線は大師の清浄無垢な顔の表情を描き出しており、禅的な台詞は高尚の模範である大師の一生を物語っていた。その漫画は二〇〇〇年に出版された。李道源にとって初めての仏教漫画である。

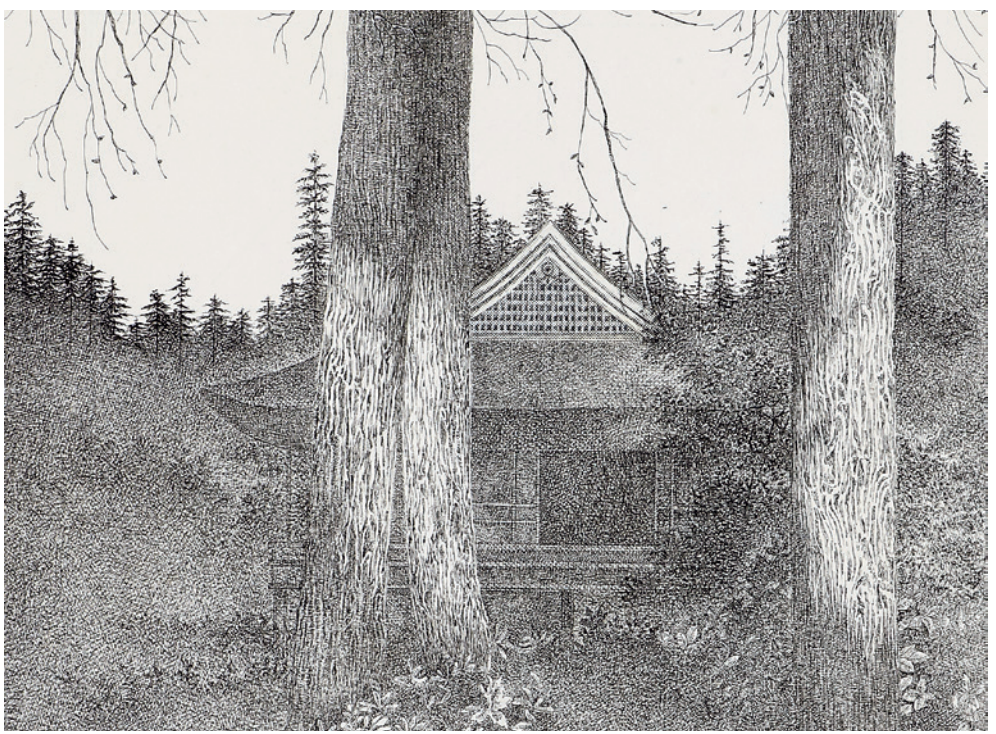
意外な来客

李道源は一枚一枚の絵が完成すると大事にしまうので、家族もどれだけの作品があり、何が描かれているのか知らない。病気になってからはあまり来客もなく、いつも一人で絵画の創作に浸っていた。

二〇〇九年のある日、慈済ボランティアが彼の家に現れた。その時、慈済基金会は弱者家庭の子供の学費を支援する「安心就学プラン」を推進していた。「お宅に就学しているお子さんはいらっしゃ

■李道源の解説

この絵は《唐・三蔵大師伝》の情景を現したものです。私はいつも自分のことを「昔の人間」だと思っています。唐の建築様式を好み、三蔵法師のように、法脈を世に伝えるために、西方に仏教を学びに行く困難をも恐れない勇気を持つことを自分に言い聞かせています。挿絵は出版社の好評は得られませんでしたが、毎回、それを見ると、感情が高ぶって来ます。



いますか?」。陳琬愉、賴盈勳、李學明の三人のボランティアは、就学中の李道源の姪のためにやって来たのである。

「いますよ」と李道源の父親がボランティアを出迎え、会話をするうちに李道源のことを話した。「部屋で寝たきりの息子がいます」

ボランティアたちは父親の同意を得て、その部屋を訪ねた。

「こんにちは。慈済のボランティアです」と陳琬愉が明るく挨拶したとたん、部屋に日が射したようだった。李道源は心の底から嬉しかったが、あまり大きな期待は抱かないようにした。「また来ることはないのだろうと。彼は三十数年前に自分が病気になってから、一家が困窮したことを知っていた。「誰もこんな病気には耐えられませんよ」と話す。

数日後、陳琬愉は何人ものボランティアを伴ってまたやって来た。「道源さん、様子を見に来ましたよ。昼寝から起こしてしまいましたか?」

「とっくに起きてましたよ」と彼は笑いながら電動の車椅子を操り、部屋から居間に移動した。二坪足らずの空間に十人も入ったので、とてもにぎやかになった。

「体の自由が利かず、片手しか動かせないけれど、まだ呼吸していることにとても感謝しています」。李道源は身体障害者になっても人生に失望することなく、呼吸できることは絵を描き、読書ができることだと彼は言った。彼にとって、絵を描くのは三度の食事と同じで、心を満たす糧であり、楽しい夢を描き出す術だ。

李道源の心の中には桃源郷があり、人の知らない苦しみと楽しみがある。彼を励まして、閉ざされた生活から抜け出させる必要があるとボアランティアは感じた。彼をケア世帯に登録し、毎月経済的な援助をするほか、電動車椅子の修理や電池の交換など必要な時もただちに手伝いに来ることにした。

訪問の時、ボランティアはいつも李道源の絵を鑑賞するのが楽しみだ。「どうして絵の中には人がいないのですか?」と以前聞かれたことがある。病気になってから絵を描き続け、三、四年経ってから「どうして人を描かなかったのだろう?」と自分でも気がついたが、今に至るまでそれは変わっていない、と彼は微笑んで言った。

「将来人を描くとしたら、それは年老いた母でしょうね」。母親は八十歳に近いが、息子を世話するため長期間にわた

り睡眠不足に陥っている。二、三時間毎に彼を寝返りさせてマッサージし、昼間はリハビリに付き添い、床ずれができないように彼の皮膚を気遣っている。

十五歳で発病 途絶えた学業

訪問の回数が増えるにつれ、ボランティアは李道源の置かれている状況が次第に分かってきた。

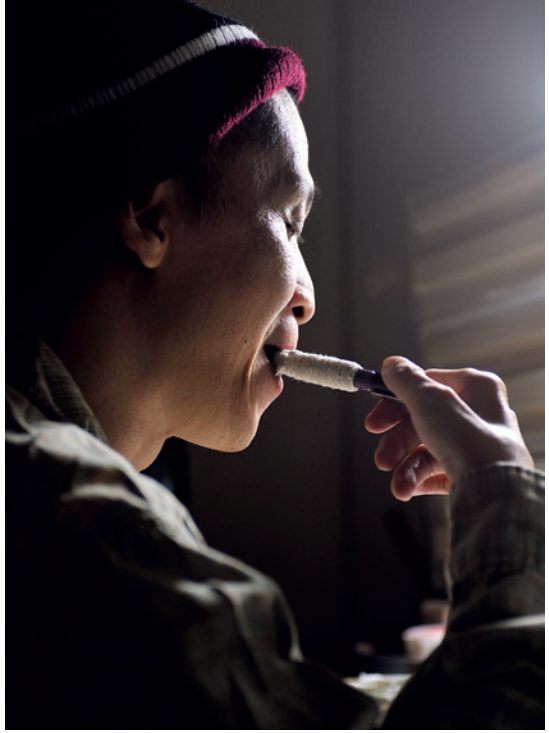
彼が十五歳の年の旧正月二日、姉と一緒に叔母の村のお祭りに行った。帰る途中、彼は突然左手に激痛を感じ、その後、鈍い痛みと麻痺症状が現れた。父親のバイクから降りた時、家の中に入る力さえなかった。

父親は状況を察知してすぐに病院に連れて行った。入院して四日間、医師は原因が分らず、「脳膜炎が引き起こした病変の可能性があり、脊髄液を採ってさらに検査した方がいいでしょう」と家族に言った。

「検査しても原因が判明しないから、脊髄液を抽出するとは！」。祖父は孫が半身不随になることを恐れて頑に反対した。父親は李道源の意識がはっきりしており、とくにほかには症状がないことから、家に連れて帰り休養させた。

冬休みが終わって新学期が始まり、同級生たちは学校に戻った。李道源は寝たきりから、大きな黒い床ずれができてしまった。家族は大した病気ではないと思っていたので、学校には引き続き就学すると伝えていた。しかし、この病気は彼と家族にとって苦難の始まりだったのである。

母親は毎日、彼の傷口を洗って薬を塗ったが、良くなる兆しはなかった。息子の背中の黒くて深い傷を目にして、涙を流しながらどうしたらいいか分からなかった。人から漢方薬を紹介され、全部試



●李道源は右手でペンを持ち、口でペンケースを開けて絵の作成に取り組む。生活の中でも、数多くの動作は手と口を併用しなければならず、彼は努力して克服して来た。

してみた。だが何日経っても、傷口は治癒しなかった。

李道源は一日中ベッドで過ごした。彼が幼年の頃、父親は祖父の畑を見限ってモダンな電気屋を始めた。レコードや電気用品を販売し、大きな収入を得た。裕福になった父親は五人の子供全員にピアノを習わせた。十個の鍵盤まで弾くことができた李道源の左手は今は使い物にならず、鍵盤を押す力さえなかった。

どうしようもない状況下で、人からどこそこの廟を紹介されれば、父親は神頼みに行った。廟では、あらゆる入り口にお札を貼り、毎日お参りした水を息子に飲ませるようにとの神様のお告げを伝えられた。

李道源は歩くにも人の助けがいる状態だったため、焦る心を抑え、学校に行きたいと言わなくなった。

そして、人から東勢にある「奇病」を専門に治療する病院を紹介してもらったが、そこで検査してもやはり原因が分らず、リハビリから始めるしかなかった。「この病院にはリハビリ施設があるから、安心して入院しなさい。来年は皆と一緒に学校に行けるかもしれないよ」と母親は真面目にリハビリするよう励まし、彼自身もきっとすぐに良くなると信じていた。

入院して十一カ月、李道源の両足には次第に力がついてきて、杖を使って歩けるようになった。それからしばらく経って旧正月になった時、家族は正月の間に病院にいるのは不吉だからと、道源の退院手続きをした。

リハビリと読書と絵の製作

一年ちょっとの時間だったが、同級生たちは皆故郷を離れてほかの地方に進学した。李道源は孤独になり、言葉に表せないほど苦悶した。彼は毎日二階のベランダでリハビリに励んだが、時々ふいに、「こんなに閑静な故郷が自分を閉じ込める場所に変わってしまったのだ」と思った。

愚痴をこぼす相手がいないので、彼は自分と対話するようになった。「何か方法を考えるべきじゃないのか？　このままこうやって一生過ごすつもりか？」

運命に負けたくない、強気の性格の彼は、さまざまな雑誌や本を読み漁った。彼は独学で日本語を学び、読んだ日本語の本だけでも数千冊に及んだ。その大半は景観や建築、美術、絵画に関する本だったが、日本の漫画も大好きだった。中

●以前たまに出かける際には、李道源は風景を撮るため必ずカメラを持って出ていた。今は体力も衰え、ほとんど外出しないが、創作力は衰えず、毎日、髪の毛のように細い製図ペンで静態の写真を生き生きとした作品に描き変えている。

でも繊細な製図ペンで描かれた絵がお気に入りだった。

その時から、製図ペン画の世界にのめり込み、関連書籍を読むと同時に、製図ペンのセットが欲しいと思うようになった。

当時、父親の電気屋は年々経営が悪化してついに店仕舞いしたため、一家の生活は困窮するようになった。幸いにも、長姉がピアノを教えて懸命に稼いだお金で、家計と李道源の医療費をまかなうことができた。そういう状況下では、喉から手が出るほど欲しくても、高価な製図ペンを買って欲しいと言い出すことはできなかった。

「道源君、僕は今日本から輸入した製図ペンを売っているんだ。買わないか?」という同級生からの電話で、彼は再び心にさざ波が立ち、見るだけでも気が済むと思った。

それは様々なサイズの製図ペンが揃っていて、定価は千五百元だった。三十数年前ではかなりの額だ。李道源は我慢できず、父親に、「同級生の商売を応援したい」と言った。思いも寄らず、父親は即座に了承してくれた。お金を払うのは彼を一番可愛がってくれる長姉である。

リハビリと読書のほか、絵を描くことが彼の生活で重要な一部分を占めるようになった。写真に写っている廟や古い建築物、草花の枯れた姿など、全てが模写の材料となった。描けば描くほど心に響くものがあり、無味乾燥の退屈な日々は突然色彩を帯びて豊かになっていった。

長姉は結婚してから姑の後について仏教を学び、二十七歳になっていた李道源に埔里の地蔵院を紹介した。彼はそこで帰依してから一心に仏法を研究し、数多くの経典を読んだ。《地蔵菩薩本願経》や《薬師経》、《普門品》、《金剛経》などで、とくに禅宗の教えを好んだ。そして、その時から仏像の模写を始めた。

大病を乗り越え再びペンを取る

李道源が三十歳の時、再び試練が訪れた。動脈から出血し、再度体が動かなくなったのだ。

「これは奇形の動脈瘤です」。検査の後、医師は「増殖の速度がとても早いので、切除は不可能です。腕の切断が最良の方法ですが、生命の危険も考えられます」と言った。病気の原因は特定できたが、ただ「生命の危険」という一言が母と子を直撃し、二人はまるで生死の離別をするかのように抱き合って大泣きした。

四十七歳の時、左手の動脈瘤が皮膚から突出してきた。葡萄の房のようになったばかりで、五十元硬貨の大きさだった腫瘍が、その二週間後には卵ほどの大きさになり、血の混じった茶色の膿が流れ出した。腕の切断手術の時、医師は彼の腹部の主動脈が剥離しているのを発見した。まず人工血管に置き換える必要があった。腕の切断手術が終わると今度は腸が癒着して食べたものが通らず、再び手術室に入るしかなかった。そうやって、李道源は前後八回手術を行った。

「母さん、こんなに苦労かけてごめん」。李道源がそう言うと、母親はいつも軽く受け流した。「お前を生んだからには、牛になってでも引っぱって行くよ」

母親は彼を世話するため、毎晩彼の側に小さなベッドを置いて寝ている。彼に寝返りをさせるのに便利で、こうして三十年が過ぎた。彼が五十歳の時、母親は未だに片膝を当てるだけで簡単に彼をベッドに載せることができるが、もう彼をベッドから抱き下ろすことはできなくなっていた。

左腕を失くして命は助かったが、萎縮した右手も絵を描く時は力が入らず、最後には胸や顎も使っても、思うように製図ペンを使うこ

●涅槃（ねはん）の樹

これは李道源が最も好きな絵である。単純な構図だが、注目されない端の方を細かく現している。彼は製図ペンを通して静寂且つ強靭な生命力の花を咲かせている。

とができなくなった。右手は軽く握れるが、細いペンを握る力はなかった。母親がある方法を思いついた。粽を縛る綿の紐を水で濡らしてからペンに巻きつけた。母子で試行錯誤して満足できる太さを模索した結果、ついに製図ペンを握って描けるようになった。

手足が徐々に萎縮していくうち、わずかに残った掌も思うように広げることができなくなった。彼は自嘲気味に言う。「頭から足まで全身わずかに残った右手を上げて拳を握るだけ。こうやって揺らすと、招き猫に似てませんか？」

五十歳で初の個展

慈済ボランティアと初めて知り合った四十四歳のあの年、李道源は肺炎を起こして集中治療室に入り、気管切開をした。ボランティアは交替で彼を見舞った。

その翌年、気管に通した管を抜くために再び入院した。母の日、陳琬愉は数人のボランティアと予告なしに病室を訪れ、彼の母親にプレゼントした。しゃることができなかった李道源の代わりに、「母の日おめでとうございます！　皆で歌を歌います。いいですか？」と言った。

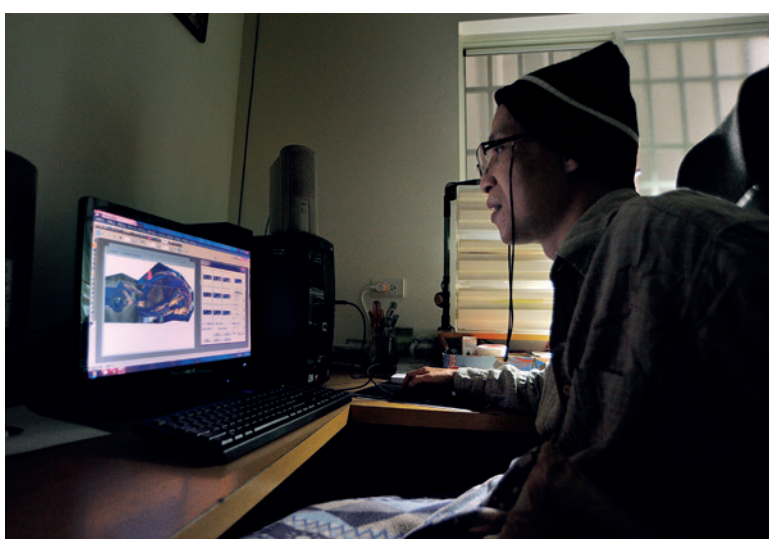
「一本の針、一本の糸……」。ボランティアたちは歌いながら手話を演じた。

「母さんの一番好きな歌です。どうして知ってるんですか？」

母親はその歌を聞くと感情が高ぶり、滔々と涙を流した。長年息子を世話して来た苦労が慰められ、人に分かってもらえたのだ。ボランティアは小柄な彼女を抱きしめた。

李道源は腕を切断してから何度も手術

●以前は写真を大きくプリントしてなぞっていたが、今はデジタル画像を欲しい部分だけ印刷して使うことができる。パソコンを使うようになってから、李道源ももはや制約がなくなり、ネットで外の世界と繋がるようになった。



したので、体重が三十七キロにまで落ちた。入院期間中、半年間は絵を描くことができず、心が晴れなかった。陳婉愉は絶えずボランティアを誘って彼を見舞い、慈済がケア世帯のために準備している絵の個展に参加するよう励ました。

「描いた絵は十数年間、倉庫に入ったままでした。ボランティアたちのおかげで他の人に見てもらうことができ、私も皆と交流することができました」。二〇一五年、台中支部で開かれた個展で、李道源は喜びを表しながら、ボランティアに感謝の気持ちを語った。側に付き添っていた長姉も感動し、「これは道源が五十歳でもらった最高の誕生日のプレゼントです」と言った。

「私たちは道源が命の闘士であることに敬服していると共に、彼は私たちが学ぶべき対象です。ですから、私たちは彼のことを大事にしているのです」と陳琬愉が言った。

李道源によると、病苦があるから仏法と出会い、経文を研究しているという。しかし、生死の境目で最大の山場に直面した時、心を静めることができなかった。逆に、仏法を絵の中に取り入れたら、生命の静けさと安定した力を見つけることができた。

体が不自由なため、彼は創作の材料をほとんど写真に頼っているが、使えない部分は無視している。最も細い製図ペンを選ぶ理由は、黒は黒でも、発色する墨色でなくてはならないからだ。製図ペンのインクは防水機能を有し、墨色が安定してくることで絵を長期的に保存することができると李道源が説明した。

インクが枯渇するのを避けるため、早く完成できるよう、睡眠を犠牲にしてま

●7年前、李道源の家を訪れてから、陳琬愉（写真左）とボランティアたちは途切れることなく世話を続け、彼のお母さんを楽にさせると共に拠り所を与えてきた。

で、彼はできるだけ毎日描き続ける。

彼が最も気に入っているのが「涅槃の樹」と題した絵である。構図は単純で、砂利と砕かれたレンガを注目されにくい部分に描いた。彼自身のように、注目されなくても、生命の光は放たなければならない、と彼は言った。

李道源は長い間、病魔の無情な試練を受けて来たが、打ち負かされることはなく、不運な人生であっても笑顔が消えることはなかった。「早くから人生を淡々と見つめてきました。例え、目の前に百万元が落ちていても、心が動揺することはありません。腰を曲げたり、手を延ばすこともできないのに、どうやって拾うのですか?」と彼は茶目っ気たっぷりに言った。

体にまとわりついた分厚い繭を破り、果てしない想像を奔放に描き出すことができるようになった。李道源は自分の消え入りそうな生命の価値を引き続き発揮させてくれた家族と、彼を大事にしてくれた慈済ボランティアに感謝している。そして皆が自分の作品を通して生命の光と美しさを感じ取ってくれることを願っている。

（慈済月刊六〇四期より）

小善でも行うべし

◎文・釋徳伉／訳・心嫈

一念の善を行動に移すと大きな功徳が生じる。

フランスのアルプス山脈付近のスキー場で一月十三日になだれ事故が発生し、九人が埋もれ、そのうちの四人が命を落としました。朝会の時、證厳法師は「人生は無常です」と嘆息されま

した。楽しみに出かけていった人々が災難に遭い、無事に帰ることができなくなりました。犠牲者の遺族は、悲痛な別離に直面することとなり、また負傷者は心身とも苦痛に耐えなければならなくなりました。「人間は大自然の力に及ばないのは当然のことですが、もし、人々が自分のなすべきことをしっかり守って、身、口、意（仏教で、動作を行う身と言語を発する口と精神作用を行う心、人間の行為のすべてをいう語）を自粛すれば、災いを招かず、平穏無事に暮らすことができるでしょう」

この冬、台湾はやや暖冬で雨も少ないため、水不足を懸念する政府は節水を呼びかけています。嘉義のボランティア許瓊英は常日頃の心がけで、「自分で作れるものは買わない」「水を大切に使う」「使わない電気はすぐに消す」など、簡素な暮らしを長年実行してきました。彼女は、洗面所の下で排水管の流れをせき止め、回収した水をふろ場やトイレの掃除に再利用しまし

た。また、玄関口の横においてある水槽の排水管を延長して、野菜を洗った水を庭先の菜園に流して灌漑用水としました。

「自分で水をリサイクルするだけでなく、近隣の人々にも熱心に勧めています」と、法師は許瓊英を褒められました。「生きとし生けるものすべてに水は必要です。人々が節水の心構えを常に持っていれば、水不足の心配はなく、安心して平穏に暮らせるでしょう。もしやたらに無駄に使うと、いつしか地球上の資源は枯渇してしまうかもしれません」

高雄のボランティア鄭楊慶は、以前はおいしいものに目がなく、暴飲暴食の結果ついに身体が悲鳴をあげてしまいました。ボランティアの潘機利は彼を励まして、まともな生活に引き戻しました。鄭楊慶は煙草やアルコールや檳榔を止める決意を固めて、さらに素食を貫いてようやく健康を取り戻しました。「牧場で家畜を飼うと大量の水を使います。もし肉の需要が少なく

なれば、飼育の需要も減少することでしょう。そこで、節水だけではなく、生態が自然に戻り、気候の調和がとれるようになると衆生も穏やかに生活できるようになります」と法師はおっしゃいます。

フィリピン・マニラ市パラオ区の貧民窟で火災が発生し、三千世帯以上が全焼しました。慈済ボランティアは、炊き出しと共に物資を配付しました。また、セブ市で発生した火災で三百世帯以上が全焼したので、ボランティアは慈済の移動調理車で被災者に食事を供給しました。

「源から清浄になること」と法師は常に呼びかけておられます。小乾坤（人々の生活に対する心構え）の働きは、大乾坤（天地）にも影響力があるのです。「災難をなくしましょう。災いを未然に防ぐには日々の生活から始めるべきです。環境保護に力を尽くせば、生態の循環が順調になり、生物が自在に生きると人類

も安心して暮らせるのです」

菩提の林を保護しよう

昨年、ベトナムの中部は深刻な旱魃に見舞われ、土壌が塩化してしまい、農作物も減収したため、住民の生活は苦しい境地に立たされました。慈済ボランティアは困難を克服して水を運んで配付しました。飲用水だけは間に合いましたが、貯水用のバケツを農民たちに提供したものの、雨が降らなくては耕すこともできません。「気候の調和がとれないと、災難も多発しがちになり、日々の暮らしの中で不安が生じてくるのです。水が十分に使える時でも水不足の苦しみを忘れてはなりません。限りある資源を大切にして、日ごろ心して災いを未然に防ぐだけでなく、さらに心ある人々に愛と善の本能を啓発すべきです」と

法師は話されました。

フィリピンに住む七歳の男の子サンニちゃんは、脊椎を患い、長期治療が必要でした。家計が苦しい一家にとって、サンニちゃんの医療費は重荷でした。慈済ボランティアは手術の費用を援助し、また、リハビリ用の歩行器を提供しました。手術後の回復が良好なので、サンニちゃんのお祖父さんは歩行器をよその人に譲りたいと、ボランティアに返しました。それを知った隣人は心を打たれ、自分ももう使わなくなった松葉杖を寄付したのです。

善の行いはたとえ些細なことであっても、一念の善意が生じると必ず一粒善の種が芽生えてくるのです。「小さな草も大きな樹木も一粒の種から成長するものです。微小な善行を軽視してはなりません。人を助ける気持があれば、すでに一念の仏心が生じたことになるのです。そして、行動に移していけば無量の

功徳があるのです」と法師はおっしゃいました。

「草木は雨や露で潤うことにより芽生えて成長するのですが、心の乾きには仏法の水を心の栄養として摂るべきです」「みなが菩提の種を一粒一粒と大事に見守り、仏法の水を吸収して心の畑をバランスよく耕すのです。慧命の養分となるものを心に蓄え、菩提の林を保護することを期待しています」と法師はおっしゃいました。

（慈済月刊六〇四期より）

慈済大事記五月

訳・済運

05・03	エクアドル水害を受け、慈済災害支援チームはマナビ州サンタアナ市で被災者に見舞い金を配付した。世帯人数によって300ドル～500ドルを1248世帯に配付するとともに、灌仏会も行った。
05・04	◎慈済科技大学は11の小規模農家と9つの企業、9つの政府機関及び花蓮農業高校と合同で「藜米の郷・花蓮台東地区特有の農産物を普及する同盟」を結成し、覚え書きを交わした。産業界と自治体が合同で資源の提供や人材の育成を行い、地域の特色ある産業の普及に尽くす。
05・05	◎桃園市慈済ボランティアが毎月第1木曜日に蘆竹区の長期ケアセンターでお年寄りのケア活動を行うようになって今年で5年目になる。この日ボランティアは灌仏会を準備し、寝たきりのお年寄りが仏像を水で清めることができるように、移動式浴仏台をベッド脇に設置して浴仏を行った。 ◎慈済基金会が台東県の9つの学校の建設を支援した「防災希望工程」のうち、台東県関山中学校でこの日、寄贈および起用の式典が行われた。

慈済はそのほかに復興、建和、馬蘭、康樂、鹿野、光明の６つの小学校と関山、桃園、知本の３つの中学校の建設を支援している。昨年２月２２日に合同起工式を行ってから１年が経った現在、１３３の教室と５つの幼稚園教室、宿舎兼食堂棟、２棟の体育館、重量挙げ専用体育館（十部屋の宿舎を含む）などが完成し、２２７０人の学生が使用している。

◎イタリア、ドイツ、フランス、イギリス、オーストリアなどの４２人の慈済ボランティアが５、６両日、イタリア中部地震の被災者に祝福金を配付した。レッテ州レオネッサ市とチッタレアレ市、アクモリ市の住民３００世帯を支援した。

◎北区の慈済ボランティアは金門島の刑務所で灌仏会を行った。８０人以上の受刑者が参加して、壇上で手話ミュージカル「泥の中から蓮の花が咲く」を演じ、改心の決意を表した。慈済は昨年から刑務所で毎月第１・第３金曜日に読書会を開くとともに、手話を教えている。

０５・０６

慈済タイ支部はアユタヤで新芽奨学金授与式を２回に分けて行い、バンプラフ町、バンポエン町、ワトヨム町、バンパイン県、パチ県の３８６人の学生を支援した。

０５・０８

ヨルダンと台湾の慈済ボランティア一行１１人がマフラグ市で、現地の慈善団体が開設したシリア難民の子供の学校を訪れ、校舎の家賃一年分と子どもたちへの文房具を支援することを約束した。花蓮慈済小学校の生徒たちが書いた祝福のカードも難民の子どもたちへ手渡した。

０５・１１

花蓮慈済ボランティアは花蓮刑務所が企画した「母の日懇親会」で、

	３回の灌仏会を行った。そのうちの１回は未成年と女性の受刑者の懇親会で、受刑者はボランティアの手伝いの下に母親にお茶を入れてあげたり、母親の足を洗ってあげたりした。また、手話ミュージカル「ひざまづく羊」を演じ、犯した過ちを懺悔した。
０５・１９	早朝、屏東県恒春町の南門養護ホームで火事が発生し４人が死亡、１００人以上のお年寄りが緊急避難した。そのうちの５５人が恒春の３つの病院に搬送された。慈済ボランティアは被害者を見舞うとともに緊急慰問金を配付した。
０５・２０	◎慈済基金会は２０日、２７日、２８日の３日間、高雄、花蓮、台中、桃園の静思堂で防災・災害支援に関する講習会を開いた。参加したボランティアは防災理念を強化し、合心防災協調センターの役割について理解を深めた。また、近隣地域の防災支援の協力体制と隣接区域同士で支援することを取り決めた。
０５・２２	◎慈済科技大学販売流通管理部はＴＥＤが認証した講座を開いた。主題は「科学技術と人文」で、有機農業、気候変動、研究開発と設計、メディアなどの分野の専門家を招聘して行われた。 ◎台北慈済病院は「ダヴィンチ外科手術システム」を導入し、この日ダヴィンチ手術室の起用式が行われた。 ◎花蓮慈済病院と　長弘生物科技公司及び美時化学製薬は、悪性脳腫瘍標的薬物 Cerebraca wafer と脳腫瘍治療薬 Temozolomide を併用した治療の臨床試験を共同で行うための覚え書きを交わした。 ◎慈済５１周年の「仏誕節、母の日、慈済の日」を祝う灌仏会は、４月から台湾各地の地域社会で行われてきた。５月２２日までに世界４０の国と地域で合計５８２回行われ、２９万人以上が参加した。

各国の連絡所

本部
971 花蓮県新城郷康樂
村精舎街 88 巷 1 号
TEL:886-3-8266779
886-3-8059966
志業中心（静思堂）
970 花蓮市中央路三段 703 号
TEL:886-40510777 # 4002
0912-412-600 # 4002
花蓮慈済医学センター
970 花蓮市中央路三段 707 号
TEL:886-3-8561825
玉里慈済病院
981 花蓮県玉里鎮民権街 1-1 号
TEL:886-3-8882718
関山慈済病院
956 台東県関山鎮和平路 125-5 号
TEL:886-89-814880
大林慈済病院
622 嘉義県大林鎮民生路 2 号
TEL:886-5-2648000
台北慈済病院
231 台北県新店市建国路 289 号
TEL:886-2-66289779
台中慈済病院
427 台中県潭子郷豊興路一段 88 号
TEL:886-4-36060666
FAX:886-4-36021123
慈済大学
970 花蓮市中央路三段 701 号
TEL:886-3-8565301
FAX:886-3-8563604
台北支部
106 台北市忠孝東路三段 217 巷 7 弄 35 号
TEL:886-2-27760111
FAX:886-2-27761244
慈済人文志業センター
112 台北市立徳路 2 号
大愛テレビ局
TEL:886-2-28989999
静思人文
TEL:886-2-28989888

アメリカ
総支部（San Dimas）
TEL:1-909-4477799
北カリフォルニア支部
TEL:1-408-4576969
ハワイ支部（Honolulu）
TEL:1-808-7378885

カナダ
TEL:1-604-2667699

メキシコ
TEL:1-760-7688998

ドミニカ Santo Domingo
TEL:1-809-5300972

ブラジル　Sao Paulo
TEL:55-11-55394091

イギリス
TEL:44-20-88699864

フランス
TEL:33-1-45860312

ドイツ　Hamburg
TEL:49(40)388439

オランダ　Amsterdam
TEL:31-629-577511

スウェーデン　Goteborg
TEL:46-31-227883

オーストリア　Vienna
TEL:43-1-7346988

南アフリカ　Gauteng
TEL:27-11-4503365

中国蘇州
TEL:86-512-80990980

香港
TEL:852-28937166

フィリピン Manila
TEL:63-2-7320001

タイ　Bangkok
TEL:66-2-3281161-3

ベトナム　Hochiminh
TEL:84-8-38535001

マレーシア Penang
TEL:604-2281013

ミャンマー Yangon
TEL:95-1-541494

マレーシア
Penang
TEL:604-2281013
Malaka
TEL:606-2810818

シンガポール
TEL:65-65829958

インドネシア　Jakarta
TEL:62-21-5055999
大愛テレビ局
TEL:62-21-50558889

ヨルダン　Amman
TEL:962-6-5817305

トルコ　Istanbul
TEL:90-212-4225802

オーストラリア Sydney
TEL:61-2-98747666

ニュージーランド
Auckland
TEL:64-9-2716976

慈済

２０１７年６月１５日発行・２４６号
中華郵政台北誌字第９０９號執照登記為雜誌交寄
Printed In Taiwan

発行人　釋證厳
発行所　慈済基金会
〒 112 台湾台北市北投区立徳路 2 号
編　集　慈済日本語翻訳チーム
杜張瑤珍・張涵
校　閲　山田智美
電　話　(886)02-2898-9000
FAX　(886)02-2898-9920
E-mail: 019874@tzuchi.org.tw

■

慈済基金会日本支部
〒 169-0072　東京都新宿区大久保 1-2-16
電　話　(03)3203-5651 ～ 5653
FAX　(03)3203-5674
E-mail: jptzuchi@yahoo.com.tw
tzuchi@tzuchi.jp

證厳法師のお言葉、委員や会員の体験談、慈済に関するニュース等を日本の方々にお知らせする目的でこの小冊子を編集しました。日本文への翻訳は素人である私たちがしましたので、不備な点や、つたないところがあると思います。ご感想やご教示がいただけますれば幸いに存じます。（日文組編集同人）

小琉球島

花瓶岩は小琉球島のシンボル。全島が珊瑚礁でできて、独特の自然環境を有し、大勢の観光客が訪れる。経済を発展させる反面、大量のゴミやバイクの騒音、大気や排水汚染といった問題をもたらす。

（撮影・黄筱哲）